

外国人留学生の言語意識についての現状調査(2) —平成24年度国語に関する世論調査に連動して—

A study of the Consciousness on Japanese Language by International Students (Part 2)
— In relation to a 2013 Public Opinion Poll on Japanese Language —

中村 朱美
Akemi NAKAMURA

〈要旨〉

平成25年3月、平成24年度国語に関する世論調査が実施され、同年9月、文化庁文化語国語課により、その報告書が公開された。この世論調査に連動し、外国人留学生における言語意識を探るべく、調査票によるアンケート形式により「言葉遣い、言葉の意味や使い分け」、「異字同訓の漢字の使い分け」、「慣用句や言葉の意味」の3項目について、漢字圏である中国からの留学生を対象として調査を行った。世論調査における傾向に対して顕著な差異が見られる項目については、母語の影響等が推測されるものもあり、その言語的背景への考察を進めた。また、本調査結果の分析により、漢字圏や上級レベルの日本語学習者への日本語教育に資する新たな知見を得ることができた。

〈キーワード〉

言語意識、漢字圏、日本語、世論調査、外国人留学生

3-3 調査対象のオノマトベの意味

世論調査¹⁾の対象である五つのオノマトベの内、「きんきん」、「さくさく」、「ざっくり」の三つについては、擬態語としての意味用法と擬音語としての意味用法が併存している。「ほっこり」、「うるうる」はいずれも擬態語の意味用法のみである。用例が豊富に挙げられている『日本国語大辞典』²⁾における語釈をもとに、各オノマトベについて考察を加える。

まず、「きんきん」については、『日本国語大辞典』において以下の語釈が示されている。

・ きんきん (副詞)

①金属的で、するどく、耳にひびくようなかん高い音や声を表わす語。

②固く張り詰めたさまを表わす語。

世論調査における「きんきんに冷えたビール」のオノマトベが形容する内容は、上記の語釈には該当せず、前稿³⁾で述べたように拡張された意味での使用例である。

『日本国語大辞典』によれば、金属的で鋭く耳に響く音や声を形容する擬音語としての意味用法については、永享8(1436)年の『看聞御記』における用例がある。

また、鋭く耳に響く状態を形容する擬態語としての用法が『広辞苑』⁴⁾に挙げられている。「頭や耳に感じる鋭い痛

み」という語釈があり、「耳がきんきん痛む」という用例が示される。『日本国語大辞典』にも擬態語としての意味用法が示されており、「固く張り詰めた」状態を形容するとあるが、「呼吸がはげしくなると冷たい空気で、鼻穴がキンキンしてきた」という用例があり、小林多喜二の『防雪林』(1928)が出典となっている。この用例では、冷たい空気によって引き起こされる張り詰めた状態を「きんきん」というオノマトベが表現している。

「きんきんに冷えたビール」における「きんきん」は、極度に冷えた張り詰めた様子や頭が痛くなるほどの冷たさを形容しているものであり、冷たさによる頭の痛みと張り詰めた様子のいずれをも形容するオノマトベである。上述した「頭に感じる鋭い痛み」と「固く張り詰めた状態」が混在するわけであるが、着目すべき点は、それらがマイナスのイメージとしてとらえられているのではなく、冷たくおいしいビールというプラスのイメージとなっていることである。

現代日本語のオノマトベについて、豊富な用例を挙げ、その高低のアクセント、意味・用法、イメージ・ニュアンス、類義語との相違、同族語・関連語について詳しく記述されている『現代擬音語擬態語用法辞典』⁵⁾では、「きんきん」の意味、イメージ・ニュアンスについて、次のように

記述されている。

なお、音声によって頭を感じる痛みを形容するオノマトペとして、「きーん」という類義語も見出し語となっており、併せて示すことにする（下線は筆者による）。

・ きんきん

- ①非常に高くて刺激的な音声がかん響く様子を表す。
マイナスイメージの語。

・ きーん

- ①非常に強く刺激的な音を表す。ややマイナスイメージの語。実際の音を描写する用法で用いる。音は高く鋭く、長く尾を引いて響く。しばしばジェット・エンジンの音として表現され、鼓膜を破られそうな危険の暗示を伴う。

- ②①から進んだ用法で、鋭い痛みが起り短時間続く様子を表す。マイナスイメージの語。

「きーん」に対する記述の②には、「高地でちょっとかけ足すると、すぐに頭の奥がキーンとして心臓がどきどきし始める」、「水面に仰向けに寝たら、鼻に水が入ってしまっ

てきーんと痛い」の用例が挙げられている。「きーん」については、上記のように、ある波長の実際の音そのものの描写であり、その音によって引き起こされる感覚的痛みやそれに類似するような痛みが表現される。冷たさによって頭が痛くなることを「きーん」というオノマトペによって表現することもあるが、「きーんと冷えたビール」という表現には違和感を覚える。この違和感は「きーん」が形容する直接的・具体的な音のイメージの強さによるものであろうか。

「きんきん」には、きんきん声という派生語もあるが、「きんきん」、「きーん」のいずれにおいても、それが金属的で鋭く耳に響くようなかん高い直接的な音を形容するにせよ、そのような音声によって引き起こされる頭や耳に感じる痛みを形容するにせよ、辞典における記述では、それらはマイナスのイメージを表すものである。

「きんきんに冷えたビール」における「きんきん」というオノマトペは、マイナスのイメージではなく、プラスのイメージの意味用法となっており、冷たさを強調するプラスイメージの擬態語となっている。マイナスのイメージからプラスのイメージへの転換がある。

次に、「さくさく」については、『日本国語大辞典』において以下の語釈が示されている。

・ さくさく（副詞）

- ①水などが滞りなく軽快に流れるさまを表わす語。
さらさら。
- ②歯で物をかむ音、野菜などを刻む音、雪や砂などを踏んで歩く音、鍬、鋤などで耕す音など、連続する軽快でさわやかな感じのする音を表わす語。

③ものごとをきっぱりと言うさま。はきはき。

世論調査における「パソコンがさくさく動く」のオノマトペが形容する内容は、上記の語釈には該当しない。

『日本国語大辞典』によれば、水などが滞りなく軽快に流れるさまを形容する擬態語としての意味用法については、承久3(1221)年頃に成立したとされる『宇治拾遺物語』における用例がある。また、連続する軽快でさわやかな感じのする音を形容する擬音語としての意味用法がある。

なお、『広辞苑』には、「物事が次々と気持ちよく進行するさま」の語釈があり、「仕事をさくさく片付ける」という用例が挙げられている。また、『現代擬音語擬態語用法辞典』では、「主に若い人の間で用いられる現代語用法で、小気味よく次々と着実に進むという意味である。」として、「このパソコン、情報がさくさく出てきて気持ちいいね。」「今日は仕事がさくさく片づいた。」という用例が挙げられている⁶⁾。

「パソコンがさくさく動く」における「さくさく」は、情報機器の滞りのない軽快な動きを形容しているものである。擬態語として、水などが滞りなく軽快に流れるさまを形容するオノマトペが、仕事の進行や情報機器の処理における軽快な動きを表すものとして、その形容する内容の範疇を拡張させているのである。

「ざっくり」については、『日本国語大辞典』において以下の語釈が示されている。

・ ざっくり（副詞）

- ①大胆に物を切ったり、割ったり、突き刺したりするさまを表わす語。
- ②切り口や割れ目などが深くえぐられたり、割れたりするさまを表わす語。
- ③金や米、小石などをつかんだり、踏んだりしたときに、それらの触れ合う音を表わす語。
- ④衣服などを無造作に着ているさまをいう語。
- ⑤布地などの手ざわりや織り方、編み方が粗くて厚みの感じられるさまをいう語。

世論調査における「ざっくりとした説明」のオノマトペが形容する内容も、上記の語釈には該当しない。「ざっくり」については、擬態語としての意味用法が多岐にわたるが、「ざっくりとした説明」における「ざっくり」は、粗々と説明するさまを形容しているものである。

『日本国語大辞典』には、「織り方や編み方が粗くて厚みの感じられるさま」の語釈があるが、その粗い様子が、説明の様子としての「粗々としたさま」へと広がりを見せており、その形容する内容の範疇を拡張させているのである。

「ほっこり」については、『日本国語大辞典』において以下の語釈が示されている。

・ほっこり (副詞)

- ①いかにも暖かそうなさまを表わす語。
- ②ふくよかなさま, また, ふかしいもなどのふっくらとして柔らかいさまを表わす語。
- ③色つやがよく明るいさまを表わす語。
- ④気持が晴れたり, 仕事や懸案のことがかたづけたりして, すっきりとしたさまを表わす語。
- ⑤うんざりしたり, 困り果てたりするさまを表わす語。

世論調査における「気持ちほっこりする」のオノマトペが形容する内容も, 上記の語釈には該当しない。「気持ちほっこりする」の「ほっこり」は心が温かくなる様子を表現しているものであり, 心理状態の形容である。

『日本国語大辞典』には, 心理状態にかかわる語釈があり, 近世の浮世草子の用例が挙げられているが, 晴れやかな気持ちやすっきりとした心情や困り果てた気持ちを表すものとなっている。また, 『広辞苑』には「もてあまして疲れたさま」という語釈がある。

「気持ちほっこりする」の「ほっこり」は, これらの心理状態とは異なるものを形容しており, 暖かそうな外面的状態から温かい内面的心理状態へ, その形容する内容の範疇を拡張させているのである。

「うるうる」については, 『日本国語大辞典』において以下の語釈が示されている。

・うるうる (副詞)

- ①うるおってしっとりとしているさま, また, つやのあるさまを表わす語。特に, 目が涙でうるんでいるさまにいう。

世論調査における「うるうるとした瞳」のオノマトペが形容する内容は, 上記の語釈の「特に, 目が涙でうるんでいるさま」に相当する。『広辞苑』にも「うるおっているさま。特に目がうるんでいるさま」という語釈があり, 『日本国語大辞典』には, 「初実が大きな眼をうるうるさせながら岩木氏を笑った」(細田民樹『真理の春』, 1930年)という用例が挙げられている。

また, 『現代擬音語擬態語用法辞典』には, 「もともと, 水分を含んだ様子を表す古風な表現であったが, 近年主に若い人たちの間で目に涙がいっぱいになってあふれそうな状態に限定して用いられるようになった現代語用法。」という解説がなされている。辞書的意味として確立していることがうかがわれる。

3-4 外国人留学生のオノマトペへの意識

世論調査におけるオノマトペはいずれも, 擬態語であり, 外国人日本語学習者には難解な表現である。

世論調査では, 提示された用例におけるオノマトペについて, 言い方を聞いたことがあるかを問い, 聞いたこと

ある人には, その言い方をすることがあるかを更に問うものとなっている。

調査結果について, 言い方を聞いたことがある割合(%)を(a)とし, 言い方をすることがある割合(%)を(b)とし, 全体における(b)の割合(%)を(a)×(b)として, 以下に, 外国人留学生に対する調査結果を示す⁽⁷⁾。

・外国人留学生

| | | | |
|------|---------|----------|-------------|
| きんきん | (a)25 | /(b)0 | /(a)×(b)0 |
| さくさく | (a)33.3 | /(b)0 | /(a)×(b)0 |
| ざっくり | (a)66.7 | /(b)0 | /(a)×(b)0 |
| ほっこり | (a)58.3 | /(b)0 | /(a)×(b)0 |
| うるうる | (a)75 | /(b)11.1 | /(a)×(b)8.3 |

上記のとおり, 外国人留学生が, 調査対象のオノマトペの意味用法を使用することはほとんどない。「うるうる」についてのみ, 1割程度の使用が見られるが, これは, 世界に浸透している日本文化としてのマンガやアニメの影響によるものと考えられる。

参考値として, 世論調査における総数のデータ及び男女20~29歳のデータを以下に示す⁽⁸⁾。男女20~29歳の年齢層は調査対象とした外国人留学生と同年代である。

・総数

| | | | |
|------|---------|----------|--------------|
| きんきん | (a)76.0 | /(b)45.2 | /(a)×(b)34.4 |
| さくさく | (a)38.3 | /(b)52.7 | /(a)×(b)20.2 |
| ざっくり | (a)70.6 | /(b)53.9 | /(a)×(b)38.1 |
| ほっこり | (a)70.5 | /(b)43.8 | /(a)×(b)30.9 |
| うるうる | (a)85.1 | /(b)58.2 | /(a)×(b)49.5 |

・男女20~29歳

| | | | |
|------|---------|----------|--------------|
| きんきん | (a)98.9 | /(b)59.0 | /(a)×(b)58.4 |
| さくさく | (a)73.1 | /(b)56.3 | /(a)×(b)41.2 |
| ざっくり | (a)93.7 | /(b)68.9 | /(a)×(b)64.6 |
| ほっこり | (a)83.4 | /(b)50.7 | /(a)×(b)42.3 |
| うるうる | (a)95.4 | /(b)59.3 | /(a)×(b)56.6 |

総数においては, 「さくさく」の認知度の低さが特徴的であるが, 使用度では, 他との乖離は小さくなる。年齢層では, 「きんきん」, 「さくさく」, 「ざっくり」の認知度は男女20~29歳で最も高く, 「ほっこり」は2番目, 「うるうる」は3番目という結果であり, 極めて高い。

外国人留学生は, トレンド性の高い日本語に対する関心が高く, 日本語教育において, 形容する範疇を拡張しているオノマトペの意味用法に対する指導にも考慮する必要がある。

3-5 異字同訓の漢字の選択

外国人留学生に対する調査において、特徴的な結果が見出されたのは、異字同訓の漢字の選択についての項目である。世論調査において使い分けが問われている異字同訓の漢字は次に示す五つである。

- ・「会議で決をとる」… {取・採・執}
- ・「痛みがおさまる」… {収・納・治}
- ・「標高をはかる」… {測・計・図}
- ・「役に立つ本をすすめる」… {進・勸・薦}
- ・「委員長をつとめる」… {努・勤・務}

外国人留学生（本調査では、全員が中国からの留学生）に対する調査において、際立っていたのは、その正答率の低さである。

以下に、外国人留学生の正答率、世論調査における総数の正答率、男女20～29歳における正答率、学生における正答率を併記して示す⁹⁾。

- ・「会議で決を採る」…………… 23.1 / 59.1 / 62.9 / 54.4
- ・「痛みが治まる」…………… 69.2 / 89.1 / 88.0 / 86.0
- ・「標高を測る」…………… 69.2 / 82.9 / 85.7 / 88.6
- ・「役に立つ本を薦める」…… 23.1 / 56.7 / 60.0 / 54.4
- ・「委員長を務める」…………… 38.5 / 67.9 / 74.9 / 66.7

なお、世論調査における学生の正答率を併記したのは、学習による効果を勘案したものであったが、概して高くはないという結果である。

本調査の対象である外国人留学生は、全員が中国からの留学生であるが、漢字圏である中国からの留学生の漢字選択に対する正答率の低さは、いかなる要因によるものであるのか。正答率が極端に低いのは、「会議で決を採る」と「役に立つ本を薦める」であるが、「委員長を務める」もかなり低い。

まず、「会議で決を採る」について、外国人留学生に対する調査結果は、「取る」が38.5%で最も高く、次いで「採る」、「使うものが二つ以上ある」の23.1%という結果である。

中国語の「采（採）」の動詞用法としての第一義的意味は「とる・摘みとる」であり、「采茶」、「采桑」の用例が挙がる¹⁰⁾。一方、「取」の動詞用法としての第一義的意味は「取る・受ける」であるが、「采（採）」、「取」ともに「採用する・選びとる」の意味がある。更に、方針・手段・計画・態度等を講ずるという意味の「采取」という表現がある。「使うものが二つ以上ある」という回答は、「取る」と「採る」の二つということであろう。

次に、「役に立つ本を薦める」について、外国人留学生に対する調査結果は、「勧める」が53.8%、「薦める」が23.1%、「使うものが二つ以上ある」が15.4%という結果である。

中国語における「勸」は動詞用法として、「勧告する・説得する・忠告する」という意味があり、「勸善」の用例が挙がる。「薦」の動詞用法としては「推薦する・紹介する」の意味がある。本調査結果では、「勸」が過半数を超える数値であったことから、他の中国人留学生に「勸」と「薦」との意味の相違を尋ねてみたところ、「勸」は「薦」に比して、強くすすめるという意味があるとのことであった。「役に立つ本をすすめる」という用例における「役に立つ」という内容が、強くすすめるということとあいまって、「勸」が選択されることとなった要因ではないかと推察するものである。「使うものが二つ以上ある」という回答は、「勧める」と「薦める」の二つということであろう。

「委員長を務める」について、外国人留学生に対する調査結果は、「務める」が38.5%、「使うものが二つ以上ある」が30.8%、「勧める」が23.1%という結果である。

中国語における「務」は動詞用法として「務める・努力する・職務とする」という意味があり、「勤」は動詞用法として、「熱心にする・いそしむ・勉める」の意味がある。

「使うものが二つ以上ある」という回答は、「務める」と「勤める」の二つということであろうが、この「使うものが二つ以上ある」という回答が最も高くなった用例であり、いずれとも決めかねる異字同訓の漢字のようである。

「痛みが治まる」について、外国人留学生に対する調査結果は、「治まる」が69.2%、「収まる」が23.1%、「使うものが二つ以上ある」が7.7%という結果である。

正答率は最も高く、「使うものが二つ以上ある」という回答は最も低い。「納まる」の回答がゼロであるため、「使うものが二つ以上ある」の二つとは「治まる」と「収まる」である。

中国語では、「収」の動詞用法として「傷がふさがる」という意味があり、「収口」の用例が挙がる。「収まる」の回答は、中国語における「収」の意味が影響しているものであろうか。

「標高を測る」について、外国人留学生に対する調査結果は、「測る」が69.2%、「使うものが二つ以上ある」が23.1%、「計る」が7.7%という結果である。「図る」の回答がゼロであるため、「使うものが二つ以上ある」の二つとは「測る」と「計る」である。正答率は、「痛みが治まる」とともに最も高い。

中国語における「測」は動詞用法として「測る・測量する」の意味があり、高度計の意である「測高儀」の用例が挙がる。「計」は動詞用法として「計算する・合計する・

計画する」という意味であるが、名詞用法として「計器・メーター」の意味がある。

「使うものが二つ以上ある」という回答率は低くないのであり、「標高をはかる」という簡潔な用例において、その場面を特定し、漢字を選択することは難しいのであろうか。

本調査の結果からは、「使うものが二つ以上ある」の回答率がかなり高いことも明らかとなった。中国からの留学生にとっては、簡体字の問題もあろうが、母語である中国語の影響が考えられるものがある。同じ漢字であっても、慣用的に使用される意味に相違があることもあり、簡潔な用例においては、漢字の字義が多様である場合、その場面を特定することが、かえって難しくなるということも起こり得るようである。

4 終わりに

外国人日本語学習者の日本語意識を探るべく、本論では、オノマトベと異字同訓の漢字の2項目を取り上げた。

オノマトベについては、形容する内容の範疇の拡張という観点を主として考察を進めた。

異字同訓の漢字については、母語の影響も含め、漢字圏日本語学習に対する日本語教育に資する新たな知見を獲得

することができた。慣用句については取り上げることができなかったが、別稿を期したい。

今後の課題として、継続調査によりサンプル数を増やしていくとともに、個別面接調査を行う必要がある。世論調査も面接聴取法によって行われており、個別に聞き取りを行うことにより、更に詳細な分析が可能となる。

具体的には、オノマトベについては、どのような場面で知り得たか、それをほとんど使用することがない理由等について回答を得て、そこから獲得し得る知見を日本語教育に生かしていくことができるであろう。

また、異字同訓の漢字については、対象漢字も増やし、中国語における最も一般的・慣用的な意味を日本語のそれと比較していくことにより、漢字圏日本語学習者に対する新たな教授資料の集積につなげたいと考えている。

・付記

島田昌彦金沢大学名誉教授並びに氏原基余司江戸川大学教授(前・文化庁文化部国語課主任国語調査官)には、本調査を行う契機を与えていただきました。新たな知見を得る端緒となりましたことをここに記し、深甚なる謝意を表しますとともに、衷心より御礼申し上げます。

注

- (1) 平成24年度国語に関する世論調査は、平成25年3月に文化庁が実施し、その報告書が公刊されている(『平成24年度国語に関する世論調査』2013年9月、文化庁文化部国語課・『平成24年度「国語に関する世論調査」の結果の概要』、文化庁)。
- (2) 『精選版日本国語大辞典全3巻』2006年1月～3月、小学館。なお、精選版には、現代語・新語を中心に第二版に掲載されていない約1500の新項目が収録されており、公式ウェブサイトである「日国.NET」で公募した用例を中心に、約5000の新しい用例が補充されている。
- (3) 『金沢星稜大学人間科学研究』第8巻第1号、平成26年9月
- (4) 『広辞苑』第六版、2008年1月、岩波書店
- (5) 飛田良文・浅田秀子『現代擬音語擬態語用法辞典』2002年9月、東京堂出版
- (6) 前稿〈前掲(3)〉では、『現代擬音語擬態語用法辞典』〈前掲(5)〉における「さくさく」についての現代語用法の提示には触れず、記述が不十分であったことを記し、訂正する。
- (7) (a)×(b)のデータは、本稿において新たに示すデータであるが、(a)及び(b)のデータは前稿〈前掲(3)〉に既に示しているものである。
- (8) 総数及び(a)×(b)のデータは、本稿において新たに示すデータであるが、男女20～29歳の(a)及び(b)のデータは前稿〈前

掲(3)〉に既に示しているものである。

- (9) 総数の正答率は本稿において新たに示すデータであるが、他のデータは前稿〈前掲(3)〉に既に示しているものである。以降のデータも同様である。
- (10) 『中日大辞典』増訂版、1986年4月、大修館書店。以降の中国語の意味についても同書によるものである。

参考文献

- ・ 山口仲美『ちんちん千鳥のなく声は一日本人が聴いた鳥の声一』1989年7月、三版、大修館書店
- ・ 国広哲弥『日本語誤用・慣用小辞典』1991年4月、第2刷、講談社
- ・ 笈壽雄・田守育啓『オノマトピア・擬音・擬態語の楽園』1993年9月、勁草書房
- ・ 田守育啓・ローレンス・スコウラップ『オノマトペー形態と意味一』2001年7月、第2刷、くろしお出版
- ・ 山口仲美『犬は「びよ」と鳴いていた日本語は擬音語・擬態語が面白い』2005年11月、初版6刷、光文社
- ・ 米川明彦・大谷伊都子『日本語慣用句辞典』2008年6月、三版、東京堂出版
- ・ 町田健『変わる日本語その感性』2009年7月、青灯社

